

一回一万。

これは私が彼に抱いてもらうために必要なお金。アプリで知り合った彼の塩顔で冷たそうな雰囲気にも一目惚れした私から積極的にアプローチして、何回かデートをしてもらってから、やっとお付き合いに至った。でも、理系で周りに女性が居なかった為か私が初彼女だった年下の彼は付き合い合った途端に優しく、とことん尽くしてくれるタイプだった。事が判明した。どこに行くにも何をするにも私優先な彼とのデートは、最初こそ新鮮さがあって楽しかったけど、三ヶ月も経つと刺激がなさ過ぎてつまらなくなってしまうた。『優しすぎて、つまらない』という、どうしようもなく身勝手な理由で、付き合い半分で私から別れを告げたのだった。

なのに、どうしてそんな元彼に、お金を払ってまで抱いてもらっているのかと言うと・・・彼以外ではイク事が出来なくなってしまうから。

付き合い合っていた時から何度も関係を持っていたけど、その時には身体の相性なんて意識した事も無かった。元々イキにくかったのもあるけど、付き合い合っていた時にはそれ程イカされた記憶もない。丁寧に触れてくるだけの、ただただ優しいエッチ。そして大体は彼が一回イッて終わりだった。その程度だったはずなのに、お別れを告げた時に、最後に一回だけという彼からのお願いで関係を持った、そのセックスが忘れられないのだ。

獣の様に腰を振りたくられて、首筋を強く噛まれながら気絶するまで犯され、最後にはラブホに置き去りにされた。生まれてはじめて女である事を後悔させられ、理性を無理矢理に奪われた。でもそのたった一回のセックスで、私はすっかり性癖を歪められてしまったのだ。

私は仕事の昼休みに、彼へとメッセージを送る。

『今夜会える？』

メッセージを送れば、直ぐに返事がきた。

『またですか？』

今週三度目のお誘いは流石に呆れられたかもしれない。正直、付き合い合っていた時よりも会っ
てもらっている。

『うん・・・駄目？』

質問に質問で返しながら、私は断られる事は無いであろうと予想する。それは付き合っていた頃から今まで、私から誘って断られた事が一度も無いからだ。時々嫌われているような気もするけど、まだ未練があるのかもと感じる時もある。もしかしたらその両方なのかもしれない。まあ、今の関係で満足している私には、また付き合うなんて考えはさらさら無いんだけれど。何ならそんな考えが起きないように、他に何人かと遊んで欲しいなとさえ思う。でも最近、彼にめちゃくちゃに犯されている時間だけが身も心も満たされているというのでもまた事実。飢えを満たしてくれる危険で濃密なあ時間、自分でもおかしいと思う程に彼を求めてしまう原因なのだ。

『別に予定無いから良いですけど』

ーキーキュン・・・♡

返事が来た途端に、奥がゆっくりと濡れたのが分かった。私は期待を胸に、足取り軽く仕事へと戻った。

・・・
・・・
・・・

いつもの駅前の喫煙所で待ち合わせ。中を覗くと奥の方に彼の姿があった。彼の近くへと移動して、コンコンとノックすればパチリと目が合う。

『ごめんね、お待たせ』

他にも人がいたので口パクで伝えれば、コクリと頷きながら煙草を潰した彼がゆっくりと出てくる。一昨日会ったばかりだというのに、会えただけでもう身体が喜んでいる。私は気持ちのむくまままに、彼の腕へギユ、と抱き着いた。彼は僅かに身を引きながらも、腕を振り払わないでくれた。結局彼は優しい人なのだ。

「どうしたんですか？もしかしてもう始まっています？」

仕事帰りの疲れた顔で面倒臭そうに見下されて、私はたったそれだけのことで太腿にまで垂れるほど感じてしまう。下着はさっき、駅のトイレに捨ててきた。付き合ってた頃はあれだけ優しかった男に、邪険にされている。でもこんなに嫌々そうにしながらも、私に勃たせて、

おかしくなるほど穿いてくれる。そのなんとも言えない背徳感に、ゾクゾクする。切ない疼きにモジモジと太腿を磨り合わせる私を、彼がグイッと引き寄せる。

「……え、何、もしかして穿いてないの？」

そっと呟かれた言葉にさえ、ビクンと大袈裟に反応してしまう。

「だって、この前穿いてくるなよって……」

前回犯してもらった時に、始まる前から下着をビシヨ濡れにしていたら、『脱がしにくいので今度からは穿いてこないでもらえます?』と言われてしまったのだ。しかし彼はそんな私の反応に「は?」と呆れたように嘲笑う。

「彼氏でもない男に『穿くな』って言われたからって、本当にするなんて信じらんねー。しかもこんな街中で。まどかさんって清纯ぶった見た目と違って、本当に変態ですよね」

眉を顰めながら耳元でこっそりと罵られて、腰に回された手にグツと力を込められると、私はもう腰が抜けて立ってさえいられなくなった。カクンと脚の力が抜けた私を難なく支えながら、彼は顎ですぐ近くにあったホテルを指し示す。

「手がかかるなあ……今日はもうそこで良いですか？」

私は彼にしがみつくようにして、腕に顔を埋める。

「うん……♡」

安くて古い最低限の設備しかないホテル。恋人同士であったなら絶対に選ばないであろうホテルに連れて行かれる。でも、今の私には場所なんて、本当にもうどうでも良かった。

「……ボタン……」

ホテルのドアが閉まった途端、私は彼の首に腕を回して抱き着くと、無理矢理屈ませてキスをする。

「ッ!? 流石にちょっと待ってくださいよ……! っこら……まどかさん!」

「ソウ・・・ンツ・・・尚弥くんっ・・・尚弥くんっ・・・」

多少の抵抗は気にせずペロペロと舌で彼の唇を舐め探っていると、後ろから髪をグイッと纏めて引っ張られてしまった。

「ッ！」

「待ってって言うてるでしょう・・・？」

私の涎でベトベトになった口元を、不愉快そうに手の甲で拭いながら、苛ついた視線で凄まじく、私はうっとり頬を染めた。

「・・・ごめん、なさい♡」

「そんな顔して謝られてもね」と、ネクタイを緩める姿に性懲りもなくドキリと胸を弾ませた。彼は私を椅子に座らせると、両手を頭の後ろで組ませる。

「あ、待って。先に渡しておいても良い？」

お金を先に渡しておかないと、後からはそんな余裕が残っていないだろう。お金で繋がった関係なのだから、そこだけはキチンとしておかないと。しかし彼はそんな私の言葉は無視して、黙ったまま両手首をネクタイで一纏めに拘束してしまった。

「・・・あの、尚弥くん・・・？お金・・・」

「ハア・・・いつもの封筒でしょ？後で自分で取りますよ」

大きな溜息に戸惑ったが、そんな私に構わず彼はさっさとスーツの上着とシャツを脱ぐと、脱いだばかりのそのシャツを、私の頭の上からバサリと被せてきた。視界が真っ白になると同時に、彼の匂いでいっぱいになった私は、思わず呼吸を深めてしまう。

「ハア・・・ツ、あ、ハア・・・♡尚弥くんの、匂いだぁ♡」

「・・・本当に俺の匂い好きですね。あ、力抜いてください」

唐突に伝えられたその言葉を理解するよりも前に、両膝を大きな手で掴まれてグイッと左

右に割り開かれた。

「あ・・・！」

「下着着けずにストッキングだけとか、どんだけ変態なんですか？」

身体の線が出るピッタリとした膝上までのタイトスカートは、足を開かされた事で一気に捲れ上がり、太腿の上まで露わになってしまふ。下着を身に着けていないのだ。薄いストッキング越しには、全てが透けているだろう。

「足、椅子の上へ上げてください」

「こ、このまま・・・？」

そんな事をしては本当に丸見えになってしまう。しかし尚弥くんは戸惑う私の足を。ペシペシと叩いて急かしてくる。

「早くしてください」

硬い声色で促されて、私はおそおそと足を持ち上げる。堅い木の椅子の上でM字開脚した私は、シャツの中で顔を真っ赤に染める。自身の痴態を理解しているので、興奮と共に、じわじわとした恥ずかしさが湧き上がってくる。

「うわ。まだかさん？なんですかこれ・・・めちゃくちゃ濡れてますけど」

蔑むような彼の声も、すっかり期待しきった私には刺激にしかならず「はう♡」と熱っぽい声を漏らしてしまう。

「ハア・・・言葉だけで感じるとか、ヤバい性癖ですね」

ストッキング越しに小さな芽芯をグチツ！と押しつぶされた途端に、「ズあああっ♡」という下品な声が漏れた。指の腹でグリグリと執拗に刺激されれば、強烈な愉悅に慣らされてきた身体はビクビクと跳ねながら、どんどん熱を帯びてゆく。

「まって駄目・・・！ダメ、ダメ！すぐイク・・・すぐイッちゃうよお・・・！そんな風にグリグリされて虐められたら、まだかすぐにイッちゃう・・・！」

腰をへこへこと上下に揺らしながら一方的な快楽から逃れようと藻掻くが、指の動きは激しくなる一方だった。

「何言ってるんですか。自分で押し付けてきてる癖に。催促してるようにしか見えませんか？ほら、ダラダラ涎垂らしてる下品なここにも、欲しいんですよ？」

蜜を垂らす淫らな入り口を指でクポクポと穿られて、私はその堪らない快楽に思わず腰を突き上げる。

「ンンーーーーッ・・・ン、ああ・・・や、なんでえ？」

私が腰を突き上げた途端に、中を掻き回してくれるかと思っただ指はズチュリと引き抜かれてしまった。甘く痺れる刺激を失った身体は、より大きな快楽を求めて寂しく震える。ふるふると身体を震わせて戸惑う私に、彼は黙ってゴソゴソと何やら準備を始めた。視界が遮られていて、彼が何をしているのかは全く分からない。

「な、何してるの・・・？」

何だか心細くて小さな声で尋ねれば、返事の代わりに雌穴に硬いものが押し当てられた。蜜をぬぐい取るかのようにグリグリと押し当てられて、私はその背筋が痺れるような刺激に、フウフウと息を荒げてしまう。彼はそんな私を鼻で笑いながら、ストッキングの中にそれを忍び込ませてきた。

「へ・・・？え？え？」

何を挿れられたのか分からず戸惑う私に、彼は耳元に顔を寄せてくる。

「物足りないでしょうけど、これで我慢しててください」

そう囁かれた瞬間に、それがブブブツと中で振動を始めた。

「ヒ、あ・・・ア・・・アアア・・・！？」

それは細やかな振動を与えながら、私のクリを直接刺激してくる。薄いストッキングでクリの上に固定されたローターは、無慈悲なほど機械的に私を追い詰めていく。

「ダメダメダメダメッ・・・これ、取って！こんなのすぐイッちゃう・・・！駄目だよ・・・！まどかおかしくなっちゃう・・・！」

顔を左右に振ると被されていたシャツが落ちかけるが、彼の手ですぐにまたもとの位置へと戻されてしまった。

「俺シャワー浴びてくるんで、そのままの格好で待っててください」

そう言うとは彼は私の両肩を押さえて再び椅子へと座らせた。椅子には既に水溜りが出来ていて、お尻を付いた途端にぴちゃりと音が立った。冷たくて座り心地が悪く、もぞもぞと体勢を整えようとするがどうにもうまくいかない。

「言っときますけど、解いちゃ駄目ですからね？」

そう言い残して私を放置した彼は、さっさとシャワー室へと消えていった。そして直ぐに、少し離れた場所からシャワーの音が聞こえてくる。本当は仕事終わりのくたびれた男臭い匂いも好きなんだけどな、でも私のそんな匂いフェチは理解してもらえなかった。そのままが良いと言う私に、彼は『は？いや、普通に臭いでしょ』とそのまま抱く事を拒否された。だからしてもらう時、いつも彼からは石鹸の匂いがする。それでも、この被せてきたシャツのように、自身の匂いを行為の為に利用はしてくるのだから、完全に理解されていない訳でもなさそうだ。ああ、それにしても・・・

「ヒあ、うんっ・・・ううっ・・・あうんん・・・！」

彼に合えると思っただけでも期待してしまう、我慢のきかないこの身体は本当に厄介で、彼が私を抱く為に準備をしてくれていると思えば、それだけで興奮の材料になってしまう。そして興奮すればするほど感度は上がるもので、クリに固定されたローターから与えられる快楽は次第に身体の奥にどんどんと募っていく。

「・・・あづ・・・いき・・・そ・・・♡」

クリトリスからの甘い刺激により、トロトロと濃いゆい蜜を垂らす膣が次第にキューキューと我慢の限界を訴え始めた。本当は彼からイカせて欲しかったんだけどな、と残念に思いつつ、絶頂を迎える為に腰を浮かせれば、その瞬間に彼が部屋へと戻ってきた。

ーカチカチャ

「ッひああ・・・あ、ああッ・・・!?!」

ドアが開いたその余りのタイムミングの良さにビクリと身体を跳ねさせながら、私はそのまま変に軽い絶頂を迎えてしまった。

「・・・ん?もしかして、今イきました?」

ビクビクと身体を震わせる私の方へと近付いてくる彼の足音。何度も身体を重ねてはいるけど、オナニーを見られたかのような妙な気恥ずかしさを感じてしまって、つい口箆ってしまふ。

「っ、あ、そ、その・・・」

「・・・何?イッたかどうか聞いてるんですけど?」

冷たくなった声色に、彼が苛立ったのが分かった。

ーカチカチャ

「イひゃあああッ・・・!?!」

いきなりローターのスイッチを最強にされて、私は嬌声をあげながらコクコクと何度も頷いて肯定した。

「イイツ・・・イきました・・・ああーッ・・・ダメ!また、またイク、イク・・・!
あ、ダメ、イク・・・イクイクッ・・・いくぅうぅ・・・ッ♡♡♡」

言いながら立て続けに達してしまい、私は腰を突き出したまま、ピュクピュクツと盛大に潮を吹いてしまう。そんな私を見た彼は溜息を付きながらストッキングからローターを引き抜いた。

「ハア・・・こんなちっさい玩具でそんな何回もイクんだったら、俺いらないでしょ」

呆れたような声色で冷たく言い放たれて、私は慌ててシャツを取り払って彼の足元に座り

込んだ。

「お、玩具なんかでイッチャってごめんなさい・・・でも、私は尚弥くんじゃなきゃなの・・・！もうローターはいや・・・尚弥くんが良いっ・・・！」

少し眩しく感じる視界の中で縋るように見上げた彼は、まだ髪から水滴が落ちるほど濡れていた。バスローブから覗く彼の首の筋に水滴が垂れるのを見て、そのなんとも言えない色気に喉をコクリと鳴らしてしまう。

「尚弥くんが欲しいの・・・お願い、お願いします」

ウルウルと潤ませた瞳で、上目遣いをしながら狙って小首を傾げる。すると彼はあからさまにイラツとしたような顔をして、私の頭を掴んで引き寄せると、バスローブ越しに硬いものを押し付ける。

「俺、今日はすげー疲れてるんで、そんなに欲しいんならまどかさんが準備してくださいよ」
でも、私が指示通りに彼のバスローブを解く為に腕を下ろそうとすると、彼の手で止められてしまった。

「手、使わなくても出来るでしょ？」

冷たい視線に背筋がゾクゾクする。私は黙って頷きながら、バスローブ越しに主張するそれに顔を近づけていく。大きくテントを張ったそれをうっとり見つめてから、すりすりとおしそうに頬ずりをする。ピクン、と跳ねるそれに唇を寄せて時折チュ、と口付けてみる。彼から視線を外さずに、バスローブの隙間に鼻先を潜り込ませれば、彼の匂いがグンと増した。

「はぁ・・・♡ね、尚弥くんの・・・舐めても良い？」

彼の太腿を唇でなぞるように食べれば、彼の凶悪さが一層増した気がする。

「後で後悔したくなければあんまり煽らない方が良いと思いますけど」

眉間のシワが深まり、ギラついた瞳で脅すように見据えられて、私はもう、彼が欲しくて欲しくて堪らなくなってしまう。大きな屹立の先端にそっと触れるだけの口づけを落とし

ながら、彼の方へ欲にまみれた視線をぶつける。いつもよりもっと酷く、乱暴に犯してほしくて、ワザと焦れたく触れていく。

ーちゅ、ちゅ♡

「尚弥くん・・・凄く硬くなってるね・・・♡」

床に這いつくばるようにして、裏筋にも丁寧なキスをプレゼントしていく。ピクリ、ピクリと跳ねるそれを追い掛けながら、時折ドクドクと脈打つ血管の浮かんだ竿をパクリと啜えて、舌先でペロペロと撥ってみる。

「ッ・・・！」

落ちてくる視線が尖過ぎて、ゾクゾクして、鳥肌が止まらない。これ以上怒らせたなら、どうなっちゃうんだろう？私は想像だけで体温を上げながら、括れたカリ裏をチロチロと舌先で味わう。

「まどかさん・・・？」

いつもより低い掠れ声で名前を呼ばれた私は、瞳を細めながら、先端に吸い付いた。

ーちゅうう♡

「あ・・・はあ・・・ン・・・♡尚弥くんの先走り・・・おいし・・・♡」

血管の浮き出た赤黒くて凶悪なそのの、つるんとした先端に浮かんだ透明の液体をジュルルッと下品な音を立てて啜り取りながらうっとり微笑めば、その途端に後頭部をガツチリと押さえ込まれた。

(あ、これ・・・ヤバいかも)

そう思った次の瞬間、熱く猛ったその大きな昂りが一気に喉奥まで挿し込まれた。

ーググッ・・・！

「ッんぐうう・・・！」

唾内をみっちり埋め尽くす圧倒的な存在感に、私は眼を見開きながら嗚咽を漏らした。

「まどかさんって、どうしてそう虐められたがるんですか？・・・全く理解できねー」

尚弥くんは私の後頭部を大きな手で鷲掴みにして引き寄せながら、ガツガツと腰を打ち付けてくる。辛うじて息をする事は出来るが、反対にそれ以外の何も出来ない。顎が外れそうなほど大きく開いた口の中を凶悪に犯されて、酸欠でボーッとする頭でオナホってこんな感じなのかなと考える。喉奥を小突かれるのが苦しくて苦しくて、死んでしまいそうな程なのに、これ以上ないほど堪らない。

私は今、お金を払って付き合ってもない男に支配してもらっている。道具みたいに、雑に扱われてる。

そのことが、こんなにも気持ちいいなんて。

酸欠の頭の中でエクスタシーを感じた私がグルン、と白目を向いた瞬間、彼の大きなものがズルリと引き抜かれてしまった。

「ア・・・？あ、え・・・？」

手を離された拍子に倒れ込みながら、反射的にゴゴホと咳き込む。そんな私に、尚弥くんは静かに近付いてきた。

「まどかさん」

ドキリとした。何の感情も乗せられずに冷たい声で名前を呼ばれた私は、涎と生理的な涙でグシャグシャな顔で傍に佇む尚弥くんを見上げた。

「・・・なんでえ？」

何故途中で抜いてしまったのかを小さな掠れ声で尋ねるが、返事は貰えなかった。その代わりに、立ったままの彼から足先で両膝を開かされた。

「それはこっちのセリフですよ。ねえ、何ですか、これ？無理矢理啞えさせられて失神しそうになってた癖に、嬉ションでもしたんですか？」

「ッ、ちが・・・これは・・・」

私はビクリと肩を揺らしながら、ビッシヨリと濡れた秘部を隠そうと、とっさに足を閉じようとした。が、それは彼により大きく開かされるだけとなってしまった。

「違うないでしょ。うーわ。ビッシヨビシヨ・・・」

彼の足先で大切な場所をグリュツ♡と踏まれて、私は喉を反らしながら口を大きく開いた。

「ひあああーっ・・・♡」

「ビンビンに勃起してるクリトリス、足裏でも分かりますよ？踏まれて喜こんでるし。本当に下品なまんこしてますよね」

足裏を緩く押し当てたまま、左右に捏ねられると、期待し過ぎた身体には刺激が強く、思わず腰を引いてしまう。

「んやあッ・・・」

「は？」

その途端彼の声色が一気に変わった。私はハツとして彼の方を見上げる。今のはいけなかった。私が虐めてくださいとお願いしている立場だというのに。

「あ、ご、ごめんなさ・・・今のは・・・」

しかし彼には私の言葉は聞こえていないようだった。

「嫌？嫌って言いました？今？はっ・・・何を言ってるんだよ。好きなんですよ？こういう事される為に、乱暴に犯される為にきた癖に？」

彼は私の両足首を掴むと、そのまま引つ張り上げた。そしてお尻が浮くほど両足を引つ張りながら、上から秘部を足でグリグリと押し潰してきた。過敏になったそこへ与えられたのは、目の前がチカチカと瞬くほどの暴力的な刺激だった。

「いヒイイイツ・・・！おほおツ、つよ・・・、つよいいいい・・・ヒインツ・・・！」

私は藻掻きながら何とかその恐ろしい程の享樂から逃れようとするものの、両足首を掴まれているためにただ同じ場所でジタバタと、無残な姿を晒すはめになった。

「へえ、噛まれるのが好きなのは知ってましたけど、踏まれるのも好きだったんですね。ほら、見てくださいよ。俺の足裏までベチャベチャになっちゃいましたよ・・・」

持ち上げて見せつけられた足裏は、私が漏らした蜜でビツシヨリになっている。

「ご、ごめんなさ・・・」

しかし謝ろうとすると再びグチュリ・・・！と踏み付けられて言葉を奪われてしまう。

「アぐうううっ・・・！」

「謝んなくて良いんで。取り敢えずこのエロい汁止めてもらってもいいですか？」

しかし彼の踵でクリトリスを容赦なく押しつぶされると、その過ぎた刺激にプシッ・・・♡と潮まで噴きながら絶頂を迎えてしまう。

「ツ、ごめ・・・なしゃ・・・、ツアアアああ・・・！ダメエエツ・・・も、グリグリツ、しちゃ・・・だめ！だめ！だめエエ・・・アツ、おほおツ！イグイグイグ・・・ッ！」

立て続けに無理矢理イカされ、獣のような下品な声で痙攣するが、そんな私を見ても彼からの責苦は終わらなかつた。

「何してるんですか？俺は、今漏らしてるこれを止めてくださいってお願いしてるんですよ。これですよ、これ。分かります？あー、もう。また漏らしてる」

彼は呆れたように冷たく見下ろしながら、足裏全体で秘裂をズチュ、ズチュと擦り上げてくる。

「ヒグううう・・・ッ！も、やめ、やめでええ・・・！ちゅよしゅぎて・・・あたま、おかしくなるぐううっ・・・！」

「ちょっと、あんま暴れないください・・・こら」

グシャグシャな顔で泣きじゃくりながら必死に懇願すれば、ジンジンとして感覚が無くなってきたクリトリスを足の親指の爪でピンツ！と弾かれた。その途端に私はまたビュクビュクツ♡と盛大に潮を噴きながら、背中を弓なりに反らせて達した。

「イツ、アアアーーーーッ！アアッ・・・！ッあ、ヒイ・・・はヒイ・・・あひ・・・は、はあ、はああーーーー・・・」

ゆっくりと弛緩する身体を、足首を掴んだままの彼は静かに見下ろしている。見られているのは分かるけど、無防備に曝け出したまま、何一つ繕うことが出来ない。ゆっくりと手を離されて、私の身体はドサリと音を立てて床へと落ちる。

「・・・挿れますね」

その言葉にビクリと身体が強張る。今、挿れられたら頭がおかしくなってしまうかもしれない。腰が抜けて動けないため、せめてと床に投げ出された足をピツタリと閉じた。ほんの少しでも彼から距離を取るために、ジリジリと後退りながら床から怯えたように見上げれば、彼はギラついた瞳で口元だけを僅かに引き上げた。

「ああ、良いですね。隙のないアンタがそうやって虫みたいにウゴウゴって無様に抵抗すんの。うん、その方が・・・興奮するな」

囁くように呟かれた言葉と同時に、埃っぽい床の上で覆い被さってきた彼から一気に穿かれた。

「ウっ・・・ああああ・・・！あヒイイ・・・一気に・・・！ふかッ・・・むりい・・・！ふかイイーーーー・・・ッ！」

閉じた脚を抱え込むようにして穿かれた為に、一気に奥深くまで彼を感じる。穿かれた拍子に背筋をキューツと丸めながら達するが、彼はその収縮した膣内を抉るように力強く抜き挿ししてくる。

「ハッ、締め付けエグ・・・あ？もしかして突くたびに漏らしてます？」

「ーーーーバチユツ・・・！バチユ・・・！」

派手な音を立てながら、パンパンに張り詰めた亀頭で降りきった子宮を押し潰されては、私に人権なんてものは無くなる。ただ彼の腰の動きに合わせて、大きな声を出すだけのオナホになってしまったかのようにだった。

「オオオツ・・・おぐうう・・・ツ、おおー・・・！あ、おアアツ・・・！イツツツ、ヒイイ・・・めエエ・・・！も、メエエ・・・！」

濁流の様に襲ってくる狂おしい程の快楽に、私はおかしくなってしまいそうな自分の頭を指で掻き乱しながら、下品な嬌声を上げ続けた。

「はは、まどかさん、ずーっとイツてますね？ハメ潮すげえ・・・顔まで飛んでくるんで、体勢変えますね」

彼はぐでんぐでんになった私の身体をぐるん、とひっくり返すと、硬いフロアマットの敷いである床に押さえつけるようにして、上から腰を打ち付け始めた。

「オオツ・・・！イグウ・・・！いグツてえええ・・・ダメ、ダメ、も！イツてるぐずぐずっ・・・！ヒインソツ、そこダメツツ・・・なおやく・・・ツおぐ！ダメだつてば・・・！う、アアー・・・！だ、メツ・・・コレえ、終わんないよおお・・・！きもちいのが・・・！終わんない・・・ツツツ！」

彼からバチュ！バチュ！と卑猥な水音を立てながら連続的に穿たれば、私は額を床に押し当てながら狂おしい程の強烈な快楽に溺れさせられる。「も、も、やめてええ・・・」と、助けを求めて伸ばした手は血管の浮きでた男らしい手にあつという間に絡めとられて、そのまま後ろ手に引っ張られる。胸元まで浮き上がる程にグイ、と引き寄せられれば、密着感が増して、逃げ場が全く無くなった。

「ウザ。逃げんなくて。啞え込んで離さない癖に止めてとか・・・腹立つ。止める訳ねえだろ。つうかこんなにまんこでギューギュー扱かれたら腰止まんねーよ・・・あー、一回出すから、イケよ。ほら、イケッ・・・！」

「ぐ、あああっ・・・アアあー・・・！」

ーードクドクツ

子宮をグチュンツ！と推し潰されて、膣内が再びキューツ♡と収縮したと同時に、中で膨らんだそれが脈打つのを感じた。

「ハツ・・・ハツ・・・ハツ・・・ハツ・・・」

心臓がドクドクと激しく暴れている。短く荒い息でポーツと余韻に浸っている内に瞼がゆっくりと落ちていくが、微睡みの中に埋もれようとした途端にグイ、と腕を引かれた。

「何寝ようとしてんの？」

「アアツ・・・、な、尚弥、くん・・・ちょっと・・・待って・・・少し、休ませて・・・」

掠れた声で名前を呼ぶが、しかし既に硬さを取り戻したそれで、ゆっくりとした挿挿が始まってしまふ。

「や、なんで・・・待って・・・お願い・・・まだ、」

何故だろう。彼がいつもより、明らかに意地悪だ。顔だけで振り返った私に、彼はググツと体重を覆い被さってきた。一気に圧迫感が増して、一瞬息が詰まる。彼は耳朶にカリ、と甘噛みしながら、耳元でポソリと呟いた。

「まどかさんと会うのは今日が最後なんで、今夜は死ぬ程犯してあげますよ」

「・・・え？」

「彼女出来たんで」

それは余りにも突然の言葉で、大きな石が頭の上に落ちてきたかのような衝撃だった。